

## トン子都へいく①

(1) 春です。山からマキを山のようにしょって、女の子がひとり村の方へおりてきました。女の子は小林トシ子。ふとつているのでトン子姉ちゃんといわれています。

(2) 「姉ちゃんたいへんだよ。ウチに今川のやつがきて、またお母さんをいじめているよ」弟の正一がしらしてくれました。「まア、また借金とりね」家の前へ来て

(3) トシ子はマキをおろして「あ、なるほど。ウチの中でドナつているわ」「ねー、いやなやつだね。あいつは鬼だつて、いつかお母さんがいっていたよ。お父さんさえ生きていてくれたらねー」

(4) 「じゃア、どうあってもこの五万円はかえしてもらえないんですか」「いえ、その、一・二年まつていただければ」「そんなことはできないよ。死んだ主人に五万円かして、今じゃア利息がつもつて十万円にもなつていてるんだ」

(5) 「あのね小父さん、小父さんは死んだウチのお父さんにはトテモセワになつたつていうじゃアないの。一年や二年まつたらどう」「な、なにー。ブタ娘のくせになまいきな。ひつこんでいろー」

(6) 「こいつめー」「あ、なにをするのよあぶないわよ」今川ヤケ吉が打つてかかつた手をおさえて「小父さんかえつた方がいいよ」

(7) ヒューン バターン。「わーっ」トン子の力はものすごい。今川を外へほうり出してクツをもつて来て、

(8) 「はい、かえるのならクツですよ」「タハハハハ、おそろしい力だなア」「小父さん一年や二年まるででしょう。までないというのなら」「テヘヘ、まちますよ。一年まちますよ。さよなら」

(9) 「今川のやつは一年まつといつて行つてしまつたわ。お母さん、私東京へいつて一年みつちらはたらいて十万円ためてかえつて来ます。どうか一年間のヒマを下さい」「大丈夫かね、いくらお前がふとつていても、十万円はたい金だよ」

(10) 「正一や、お母さんをたのみますよ」「ウン、ボク、しつかりやるよ。姉ちゃん、東京つてどこへいつたら、十万円ためて来てね」と、ここにトン子は母のゆるしをえて、

## トン子都へいく①

(11) 父がのこした十万円の借金がえしのために、ふるさとの村をあとにします。「さよなら、元気でねー」いく先は、生き馬の目をぬくといわれる大東京です。さアどんなことがおきるでしょうか。